

第5週

質問 12. 私たちが神の正しい裁きによって、この世と永遠との刑罰に値するのであれば、この刑罰を逃れ、再び恵みをあずかるには、どうすれば良いのですか。

答え I 神は、ご自身の公義が満足されるようになさるでしょう。⁰¹従って、私たちはそれに対して、自分自身によってか、他の人によってか、神が要求なさる公義を満足させなければなりません。⁰²

① 人間は神の被造物の中で、最も栄光ある存在として造られました。最も悲惨な被造物になりました。なぜなら、自分たちを造った神に敵対したことで、神の永遠の審判を受けるしかないようになったからです（Ⅱペテロ 2:4）。すべての人は、神からの栄誉を受けることができなくなりました。人々は、自分がどれほど悲惨な状態にいるのか、先に悟って、救いの必要性を徹底して感じるべきです。

しかし、必ず、神の公義が先に満足されなければなりません。罪を犯した罪人は、神の正しい裁きによって一時的な審判（この世で受ける）と、永遠の審判を受けるしかないからです。罪に対する神の態度は断固たるものです。公義の神は、その正しさに従って、すべての不義と罪について審判なさるからです。

② 従って罪人は、神の正しさについてだけではなく、不義と罪と裁かれる

01 出エジプト 20:5, 23:7、ロマ 2:1-11.

02 イザヤ 53:11、ロマ 8:3-4

ことについても徹底して悟らなければなりません。それで自分は、有罪状態にいることを知り、罪に対する審判のゆえに靈魂が苦しむ状態にいなければならぬのです。そして、その罪に対して悲しまなければなりません（哀歌 5:16、エレミヤ 31:18-19）。罪人は救い（赦し）を受けたいと渴望しなければならぬ、審判から逃れる道を探さなければなりません（使徒 2:37）。

勿論、この時、罪人は罪を犯すまいと決心もし、神に一層真面目に仕えようと努力もしますが、そのような努力では、自分の罪をどうすることもできないことを悟るようになります。つまり、そのような努力をしていた罪人は、自分はどれほど無能で、腐敗した中にいるのかを悟って、さらに悩みに陥るようになります（イザヤ 57:10、使徒 16:30）。これは、神さまが私たちを低くさせる作業です。ただ、恵みだけを頼り、求めさせるためです。そのうえ、赦しを受けた以降も、高ぶる心を抱かないようにさせるためです。

③ 結局、罪人は、自分の罪が赦されるために、どのような行為によっても、神が要求なさる公義を満足させられないことを悟ります。そして、誰かによって、この公義を満足させるための代価の支払いが必要であることを知るようになります。

その方が代わりに審判を受けるのか、あるいは、負債を代わりに支払ってくれるかが必要だということです。神は、罪に対する審判をご自分の御子にすべてを注ぎました（Ⅱコリント 5:21）。これは、罪人を審判から救うために、真に十分なものです（ロマ 3:25）。

マルコの福音書 10 章 45 節を見ると、この真理について語っています。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」。結局、自分の罪を消すこともできず、罪に対する神の審判が厳重であることを悟った罪人は、赦される方法を切に求めるようになります。そして神が用意なされた恵みの方便であるキリストを悟ることで、ついに、神の赦しを体験するようになります。赦しと救いを体験した者は、当然、キリストを高め、誇るよう

になります（Iコリント1:29-30）。このように神は、ご自身の公義が満足されるようになり、同時に恵みを施すことで、栄光とられました（エペソ1:7）。

④ しかし、靈的に不注意な罪人は、この世の生活に縛られ、忙しく過ごし、自分の靈的状态について観心もなく顧みないのです。彼らは、永遠の救いについても深刻に考えもしません。彼らは、自分たちのお腹を神とし、世の事だけに心を寄せますが、それによって結局、永遠の滅びに至るようになるのです。

勿論、教会の中にいる者たちの中でも、靈的に不注意して自分を欺く者たちもいます。時には、自分自ら信じると決心し、また、教会の中で奉仕もして、宗教的な行為を行っているから自分は救われたと思う場合です。彼らは自分が信じると決心したことを信仰と考え、その上、自分たちの労苦もあるから救われたと考えます。しかし、このような者たちの中には、自分たちの罪による悲惨さと、それに対する神の審判を悟れない場合が多いです。真の悔い改めと信仰が起こされていない場合です。とても、危険な例です。

質問 13. そうだとすれば、罪人である私たち自身が、神の公義を満足させられますか。

答え I 決してできません。それどころか、私たちは日ごとに負債を増し加えています。⁰¹

① 神の公義を満足させられる方法は二つです。律法が要求するのを完全に守るのか、そうでなければ、律法を守れなかったことに対する刑罰を受けることです。しかしこの二つは、私たち自身ではできないことです。人間は善を行

01 詩 130:3、マタイ 6:12、ロマ 2:4-5.

える力を失いました（ヨブ 9:2-3、詩 143:4、ロマ 8:7、マタイ 16:26）。私たちは外的に善行のように見えるものがあつたとしても、それは汚れた衣のようなものです（イザヤ 64:6）。ローマ教皇主義者たちが主張するように、私たちの良い行い、時には、苦行を行ったとしても、それが、神の公義を完全に満足させられません。そのような行為ではすべてが不足だからです（ヨブ記 10:2-3、詩 130:3）。私たちは神の公義を満足させられません。罪の負債を返せる方法が私たち自身にはないからです（マタイ 18:24-25）。

さらに私たちは日ごとに罪を増し加えることで、私たちの罪の負債は日に日に積み重なります。それゆえ神の公義は決して満足させられません（黙 18:5）。そうだからと言って、人間が、神の審判に耐えることで神の公義を満足させられるのか、それもまた不可能なことです。「私たちのうち、だれが焼き尽くす火に耐えられよう。私たちのうち、だれがとこしえに燃える炉に耐えられよう」（イザヤ 33:14）、という御言葉のように、神の永遠の審判を耐えられる靈魂は誰もいません。

② そうだとすれば、私たち自身が神の公義を満足させられないのなら、他の方を通す方法が必要です。もし、罪人自ら、あるいは、他の人を通して神の公義が完全に満足させられ、それによって審判から放免され、恵みを再び受けられるのなら、その人は救われるでしょう。

③ 神の公義と審判について悟るようになれば、罪人は、自分の生活を改革しようと試みます。しかしすぐに、自分には能力がないことを認めるようになります。自分の生き方を改善しようとするけど、決して、改善することができないことを知るようになります。その時、その靈魂は謙遜になります。自ら正しくなろうとした試みを放棄して、ただ、神の恵みに覆われたいと願い、渴望するようになります。

ところが愚かな律法主義者たちは、恵みの上に行いを加えて義と認められ、神の審判から逃れると思っています。律法主義者たちは、神の律法を完全に守

れないことに同意しないのです。むしろ自分たちの不足な行為を過大評価して、それを根拠にして義となれると考えます。

従って、律法主義者たちに表れる霊的特徴は傲慢です。このような姿は、アルミニウス主義者たちも同じです。自分たちの霊的無能を認めようとせず、自ら正しくなろうとします。自分たちは十分、キリストを選べる力があると考えます。従って、キリストを選び、信じる主体である自分が重要なのです。彼らが、このように考えるようになる主な原因は、神の公義と審判を無視して、ただ神の愛だけを強調する思想体系のせいです。

質問 14. それでは、単なる被造物である何かが、私たちのために神の公義を満足させられるでしょうか。

答え I いいえ、できません。まず、神は人間が犯した罪の罰を、他の被造物に代わりに審判なさいませ⁰¹ん。最も、単なる被造物では、罪に対する神の永遠の怒りの重荷に耐え、かつ他の者をそこから救うことなどできないから⁰²です。

① 他人の罪を放免して上げるために、神の公義を満足させられる人間や被造物はありません。天使たちが審判を代わりに受けることもできません。罪に対する審判は体と霊魂に付加されるので、天使たちは、霊的存在だからです。動物たちも神の公義を満足させられません。動物たちは霊魂もなく、自発的に審判を受けられることもできないからです。

旧約での犠牲のいけにえ制度は、罪に対する審判を満足させるには十分なほど、完全な制度ではありませんでした（ヘブル 10:3-4）。ならば霊的存在である

01 エゼキエル 18:4, 20、ヘブル 2:14-18.

02 詩 130:3、ナホム 1:6.

私たちと同じような人間が、私たちのすべての罪と人類の罪のために支払うことができるのか、できません。人間は先ず、自分の罪に対して責任を負わなければならないからです。

② ある人が、他の人のために喜んで罪を代わりに担おうとする意図を持つことはできます。しかし先ず、自分の罪から担わなければなりません（ガラテヤ 6:5）。イスラエルの民が罪を犯した時、モーセは、自分の名を命の書から消して彼らを赦してくださるようにと要請しました。しかし神は、モーセの要請を断りました（出 32:30-35）。人間は、自分自身の罪のゆえに神の公義を満足させられません（質問 13 番で、すでに調べたように）。従って、他の人の罪のためにも神の公義を満足させられないのです。

人間が他の人のために神の公義を満足させようとするれば、その者自身が全能の力を持っていなければならないし、罪人を完全に変わらせて、それ以上、彼が、神の怒りを受けないようにすることです。しかし人間はそのようにはできません。もし人間が、他の人のために神の公義を満足させられるとしても（勿論できないけれど）、どの人生も、その人を続けて便りながら生きて行くことはできないからです（イザヤ 44:21-25、エレミヤ 17:5-8）。

③ 最も、神の怒りは激しく重いので人生が担うことはできないのです（詩 76:7、90:11）。神の永遠の怒りを耐えられる被造物はいません。自分自身に対する永遠の罪の定めすら耐えられないのに、他の人のためには最も不可能なことです（詩 130:3）。従って、どのような方法を使用しても、自分の兄弟を贖える人はいません。自分のために贖いの代価を神に奉げることもできません。なぜなら、霊魂の贖いのために支払うべき値が余りにも高いからです（詩 49:7-8）。

④ 自分の罪と神の審判を悟った罪人は、神の審判を避けられる道を探し求めるようになっていきます。なぜなら、このような神の審判は、到底、担えるも

のではないからです。審判を避けられる道や方法を探す以前まで、その靈魂は、神の審判の嚴重さのゆえに、一切平安がありません。担え切れない自分の罪の重さが良心を押し下げるので、苦しみは加重されます。このような靈的状态は、自分に救い主と仲保者が絶対的に必要だということを認めさせます。しかし、愚かな罪人は、このような苦しみを忘れてしまおうと努力したり、人間的な方法と手段を通して間違った慰めを受けようとします。結局、愚かな罪人たちは悔い改めないのです。

質問 15. それでは、私たちは、どのような仲保者と救い主を、必ず、求めるべきでしょうか。

答え I その方は、まことの人間でなければなりません。⁰¹そして、完全に正しい方でなければなりません。⁰²そしてすべての被造物より力が優れなければなりません。その方は、また神でなければなりません。⁰³

① 私たちは、私たち自身を救うことはできないので、そして、他の被造物が私たちのために神の公義を満足させられないから、必ず、仲介者と救い主を探す必要があります。完全な仲保者と救い主を探す以前までは望みはありません。仲保者を探す以前までは、私たちの靈魂は罪責の重みと、神の嚴重な審判の下で叫ぶしかありません（使徒 16:30）。また仲介者は、私たちの贖いのために必要すべてを満足させなければならないのです。

② 仲介者は、神と人間との間を和解させなければなりません。そうするため

01 ロマ 1:3、I コリント 15:21、ヘブル 2:17.

02 イザヤ 53:9、II コリント 5:21、ヘブル 7:26.

03 イザヤ 7:14, 9:6、エレミヤ 23:6、ヨハネ 1:1、ロマ 8:3-4.

には、仲保者に要求される資質がありますが、その方は、まことの人間でなければなりません。体と靈魂を持つ存在として人間の本質的な属性を持っていないければならないのです。そしてその方は正しい方でなければなりません。自分自身にどのような罪もあってはならず、神の律法を完全に守れる者でなければなりません（ヘブル7:26）。その方は、すべての被造物より優れ、能力がなければなりません。そして、ご自分の正しさによって神の公義を満足させなければなりません。

従って、その方は、人間であると同時に神であるべきです（ヘブル7:26）。一人格の中に神でありながら、同時に人間である存在こそ仲介者となること（イザヤ7:14）です（質問16-17番で、さらに詳しく説明している）。結局、このような仲保者は、神によって用意されるしかないのです（マタイ17:5、1テモテ2:5、1ヨハネ1:3）。

③ 靈的に目覚めた者は、自分の罪によって神への恐れが生じますが（Ⅱコリント5:11）、これが仲介者を必要とする事実の実際的な適用です。なぜなら、私たちは汚れているけれど、神は正しく聖なる方だからです（イザヤ6:5）。それゆえ、自分の罪責感から救われることを願い、神の公義を満足させられる方を探そうになります。不義から救ってくださる（ヘブル9:15）、罪責を代わりに担ってくださる仲保者を探そうになるのです（ロマ3:25、イザヤ27:4-5, 45:22, 24）。神の恵みによって仲保者に会うようになれば、喜びと感謝があふれるでしょう。そして自分の全生涯を通して、その方を、一番貴い存在と思ひ、仕えるでしょう（ピリピ3:4-10）。

④ ですから自分の救いについて深刻に考えるべきです。その世のことについては、あらゆる心を注ぎながら、自分の靈魂については余り関心を持たないなら、その靈的はとても危険な状態にいます（マタイ16:26）。私自身の正しい行為は、神の審判から免れさせたり避けられるようにはしてくれません。ただ、神から来る恵みを受けてこそ審判を避けられます。まことに神の審判を悟る者

は赦しを得るために泣き叫びます（使徒 16:30）。そして、神が罪人を受け入れてくださるために、キリストが与えられたことを信仰によって知るようになります（ロマ 3:25、イザヤ 27:4-5）。キリストの苦難と従順が、罪人である私に恩寵を施すためのことであつたことを悟るようになるのです。それで、真に悔い改め、信じる者は、救い主なるキリストをつかむのです。真に神の審判の前に自分の靈魂を顧みる者は悲しむでしょうし、心貧しくなり、柔和となり、義に飢え渴く者となつて、神の約束を自分に適用させながらキリストに出て行くでしょう。そして、キリストによって罪の赦しと慰めを受けるのです。

ところが、悪人が、自分たちの靈魂状態を顧みずに、時には、自ら何の問題もないと考えます。時々彼らは、律法の外的順守を通して、自分は相当正しく、救いを得るのに全然問題ないと考えます。彼らの心は全然低くないまま、自分たちの罪と悪を見られません。結局神は、この者たちを審判なさるでしょう。

⑤ 神は、私たちが仲介者を、ある特定な場所を探し、発見しなさいと要請なさるのではありません。私たちに、先ず、罪を悟らせて、自分たちに仲介者が必要であることを知るようになさいます。それで私たちは、赦しと不義をおおわれる方法と道を探すようになります。そして福音に提示されるキリストの貴重さを悟って、その方に走って行くようにさせるのです。

マタイの福音書 13 章に出て来る、畑に隠された宝の比喻（マタイ 13:44）と、真珠の商人の比喻（マタイ 13:45-46）によって、この原理が説明されています。宝と値打ちある真珠の価値と貴重さを知る者は、それを得るために自分の持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。つまり、値打ちある宝を探す過程と言うのは、自分の罪が赦される道を探すことで、その過程は、結局、福音にある、キリストの価値と貴重さを悟らせて、キリストに走って行くようにさせるのです。⁰⁴

04 ジョナサン・エドワーズはこれを「探し求める原理 (Seeking Theory)」と言い、自分の伝道に適用させました。